

科学史から見る近代（その三）

―ガリレオの宗教裁判をめぐる―

高橋 秀 裕

一、はじめに

一九世紀半ば以来、科学とキリスト教は対立関係にあるという考え方がとくに強くなり、宗教は科学の発展を妨げるものであると考えている人も決して少なくない。その古典的事例としてガリレオの宗教裁判がしばしば取りあげられてきた。つまり、ガリレオの宗教裁判は、善玉（科学）が悪玉（カトリックの宗教権力）に不当に弾圧されて有罪判決を受けた事件であり、まさにこの事件は近世初頭における科学と宗教の闘争、あるいは理性と信仰の衝突の典型的な例であるというわけである。しかし、そのために科学と宗教の関係がガリレオにおいていかなるものであったかを覆い隠してしまったともいえるのである。

この小論では、科学と宗教の歴史的関係をより明らかにする研究の一環として、ガリレオの生涯を簡単に辿りながら、ガリレオの宗教裁判の歴史的経緯を概観するとともに、彼が科学と宗教の関係をどのように考えていた

かを改めて検討することを課題とする。

二、ガリレオの生涯

ガリレオ・ガリレイは、奇しくもシエークスピアの生年と同じ年である一五六四年の二月一五日に、斜塔で有名な町ピサに生まれた。そのちようど三日後にミケランジェロが没している。ピサは、一二世紀以来、独立な自由都市として繁栄を極めていたが、一五世紀にフィレンツェに占領され、一時再生する機会も得たが、一五〇九年にフィレンツェ軍によって再征服された。

一三世紀以来の伝統あるフィレンツェ共和国は、一五世紀をとおして、新プラトン主義復興運動の中心地であり、レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロなどが活躍するルネサンス文化の中心地でもあった。しかし一六世紀にはいり、共和国としてのフィレンツェは神聖ローマ皇帝カール五世によって滅ぼされ、皇帝からメデイチ家がその統帥権を与えられていた。ガリレオの幼児期には、メデイチ家のコジモ一世にトスカーナ大公の称号が授与され、フィレンツェはトスカーナ大公国の首都となった。トスカーナ大公国はハプスブルク家の神聖ローマ皇帝の権力が直接およぶようななかで、まさに強大になりつつあったのである。

ピサはこのトスカーナ大公国に従属し、すでに斜陽都市であったが、伝統あるピサ大学を有していた。トスカーナ大公国は占領地政策の一環として、ピサの町をトスカーナの大学都市とし、ピサ大学に惜しみない援助を行ってきたのである。

◆ピサ時代のガリレオ

一五八一年九月、ガリレオはピサ大学に入学を許可された。しかし、正規の課程を修了することなく、三年半在籍したのちに退学した。退学理由は、大学の外で教えられていた学問に魅了されたためではないかと推測されているが、正確なことはわからない。伝記作家の伝えているところによれば、ガリレオは医者になることを期待されてピサ大学に進学したのであるが、父の友人であるトスカーナ宮廷付き数学者オステイリオ・リッチに出会ったことが彼の人生の転機となった。リッチは当時の傑出した数学者で、芸術家や技術者のための教育機関、アカデミア・デル・デイセーニョ（直訳すれば、デザイン学校）の数学教授でもあった。ここでは、透視画法を学ぶための基礎として幾何学や、写実的な表現のために解剖学が教えられていた。

ガリレオ以前の時代には、理論と実践はしっかりと峻別されており、すなわち、「哲学」と「技芸」は別々の場所、別々の人たちによって担われていた。アリストテレスに代表される古代の哲学者たちを超えがたい師であると考えていた大学の学者は、基本的に手仕事を軽蔑していた。一方、技芸にたずさわっていた職人層は、徒弟修業を通して仕事を伝承し、基本的に学問を修める機会がなかった。したがって、理論が実際に試されることも、職人芸が理論的に考察されることもなかったのである。

それが、ガリレオが生まれる前年に設立されたこのアカデミアにおいて、ようやく理論と実践が手を結ぶことになったのである。こうしたいわば二つの社会階層がルネサンスにおいて出会うことになり、知識をもつ職人、すなわち「高級職人」が大挙して登場し、大学ないしその周辺の学者たちは職人たちのやっついていることを学習するようになっていった。まさに理論と実践の結びつきから新しい学問が芽生えてくる時期に、ガリレオはリッチと出会ったのである。

ガリレオがリッチから学んだのはユークリッドだけではなかった。リッチの影響から彼はアルキメデスの著作の研究へと向かった。ガリレオが「誰にもまして賞賛したのはピュタゴラスの哲学的方法であり」、アルキメデスについては「その才能が抜群であるとして、自分の師と呼んでいた」のである。

ピサ大学を中途退学したガリレオは、独創的な工夫によってアルキメデスの研究を拡張していった。彼はポロニーヤ、パドヴァ、ピサ、フィレンツェなどに数学教授の職を求めて就職活動を行ったが、いずれも成功しなかった。そうした空しい努力を続けるうちに、一五八九年五月末、ピサ大学のポストが再び空席となった。以前と違い、ガリレオを取り巻く周囲の状況が彼に開運をもたらした。同年七月、ガリレオはかつて自ら中途退学したピサ大学に就職したのである。再任が可能であったとはいえ、三年の任期制、年俸も決して満足のゆくものではなかった。しかし、当時のガリレオにとって拒否できるような経済状況ではなかった。こうして彼は、生まれ故郷のピサ大学の薄給の数学教授として学問的生涯をはじめたわけである。

◆パドヴァ時代

一五九二年、ピサ大学での三年の任期が満了した年、ガリレオはヴェネツィア共和国のパドヴァ大学に迎えられた。任期は四年、相変わらず薄給ではあったが、上を見ればきりがなく、ピサ時代に比べて大幅な昇給であった。ガリレオがピサ大学を去ったのは、同僚たちとの関係がうまくいかず、給料にも絶えず不満を持ち続けているためと考えられている。前年の一五九一年に父親が亡くなり、家計の責任が家長になった彼に重くのしかかっていたことも、彼がよりよい待遇を求める理由になっていた。

この自由なパドヴァにおけるガリレオの約二〇年間の研究生生活は、生涯の中でも最も活力のある実り多いもの

であったが、後に、ガリレオは大学の講義に拘束されずにもっぱら研究に没頭できるような地位を得たいと望むようになり、次第にトスカーナ大公国のメディチ家の宮廷付き数学者となることを理想とするようになっていく。パドヴァでのガリレオは、研究を深めていくと同時に、社会的に有力な多くの知人を支持者として獲得していった。後の一六三二年の異端審問のときにウルバヌス八世として教皇の地位にあったマッフェオ・バルベリーニのような、教皇庁の重要人物もそこには含まれていた。

また、パドヴァ時代晩年のガリレオは、自分の存在をアピールするかのようになり、他の学者に論戦を挑み始めた。一六〇四年、五年の新星の解釈を巡るルドヴィコ・デツレ・コロンベ（ドミニコ会）やバルダツサルレ・カプラーとの論争、あるいは後に故郷トスカーナに移ってからの一六一二年の太陽の黒点を巡るクリストフ・シャイナーとの論争は、確かにガリレオの名を高からしめはしたが、同時に、論敵を批判するときの彼の論調の激しさや無遠慮さが、コロンベを筆頭に、強固な敵意を作り出すことにもなった。

パドヴァ時代、ガリレオは内職に、自宅わきに工場をたてて、軍事用の関数尺やレンズなどを作って販売している。さらにオランダで「望遠鏡」が発明されたという情報を得て、彼は自ら工夫して、一六一〇年前半だけでも、一〇〇台ほどの望遠鏡を製作している。それは販売するのが目的ではなく、ヨーロッパ各地の要人たちに献上するためであった。

ガリレオの望遠鏡による天体観測は、二つの大きな発見をもたらした。その一つは、アリストテレス以来、滑らかで完全な球だと考えられていた月の表面にも地球と同じように山や谷があるということ、もう一つは、木星は単一の星ではなく、その周りに四つの天体（衛星）が回っているということである。ガリレオはこの二つの新発見を『星界の報告』（一六一〇年）という標題の小著で発表する。実際、「フイレンツェ貴族にしてパドヴァ大

学数学者ガリレオ・ガリレイによって、彼が最近発明した筒眼鏡を用いて観測された事柄、月の表面、無数の恒星・銀河、ほんやりとした星々、とりわけ木星の周りを回転する四つの惑星が説明される」という副題が付いていた。

◆フィレンツェへ

アリストテレスによる宇宙観では、月下界と天上界とは厳密に区別されており、完全な天上界の天体には凹凸などあり得ないと信じられていたわけであるから、当然『星界の報告』はヨーロッパ中の知識人の間で大きな話題となった。ガリレオは、新しく発見した木星の衛星を「メディチの星」と命名し、この書物をメディチ家のコジモ二世に献じた。いわばこの戦略は、みごとトスカーナ大公の気を引き、一六一〇年九月一二日、ガリレオは正式にトスカーナ大公付き数学者兼哲学者に任命され、まさに故郷へ錦を飾ったのである。

しかし、ただ一人の君主に仕えることは、君主の好みの変化とその死によって翻弄されるというリスクがあることを意味した。一六〇九年に即位したトスカーナ大公国コジモ二世のかつての師であったサグレドは、一六一一年八月一三日付のガリレオ宛書簡の中で、次のように記している。

あなたは今では、偉大で、有徳で、そして非常に期待できる若さをもった君主に仕えておられる。しかしあなたは、この「ヴェネツィア」では、他人に命令し統治しているものに命令し、自分以外の誰にも仕える必要がなく、いわば専制君主だったのです。(中略) 私が信じるに、大公はあなたの望遠鏡でフィレンツェの街や近郊を見ることに満足していても、何らかの必要に迫られ、あなたの筒眼鏡をなおざりにして、イタリ

ア、スペイン、ドイツの出来事を検討しはじめられるかもしれません。（中略）あなたもおわかりのように、あなたがベルリンツォーネの友人たちの権威が力をもっている土地におられることが、私をとっても悩ませています。

サグレドの心配は、君主の好みに翻弄されるという理由だけからではなかった。書簡中のベルリンツォーネという人物は、フェラーラのイエズス会士であったため、トスカーナでは、イエズス会のような宗教的な権威の影響から逃れられなくなると、サグレドは忠告しているのである。とりわけヴェネツィア共和国にとって、イエズス会は宿敵であったから、ヴェネツィアの友人たちは、ほとんど例外なくガリレオの決断を危ぶんでいた。だがまだこの時点では、宗教裁判という過酷な運命が待ち受けていることをガリレオは知るよしもなかった。もし、ガリレオが友人たちの忠告に従ってパドヴァにとどまっていたならば、ローマ教皇の勢力をすでに駆逐していたこの自由都市は、彼を教皇庁に引き渡すようなことは決してしなかったのかもしれない。

◆異端審問所

ポーランドのコペルニクスが『天球の回転について』（一五四三年）を書き、太陽中心的地動説を提唱して以来、この考えが広まるにつれて、地球はすべてのものの中心にあって、不動であるという考えに基づく聖書の教えと根本的に相反することが、教会側において次第に自覚され、コペルニクスの地動説は異端の見解として当局の弾圧の対象となるに至った。そしてこの動きはイエズス会の創立にはじまる反宗教改革運動によって拍車をかけられていた。やがて教皇パウル三世によりローマに「異端審問所」が設けられ、一五五九年には最初の「禁書目

録」が發布され、異端思想弾圧の手は文字通り厳しくなっていた。ここで禁止された思想とは、次の三つにまとめられる。

- (1) 聖書の私的な個人的解釈（実際、プロテスタンティズム）
- (2) トマス・アクイナスによってアリストテレスと聖書からうちたてられた世界像、自然像と異なるものを主張すること
- (3) 新プラトン主義的思想とそれに結びついている神秘思想・魔術思想

実際、一五八七年、フランチェスコ・パロツツイが魔術を行い、アグリッパの魔術書を信奉したことによって異端審問所で罰せられた。『自然魔術』（一五八八年）を出版し、魔術師として高名を得たジャンバッティスタ・デッラ・ポルタも同様に問責され、一五九九年にはカンパネッラがその新プラトン主義的思想ゆえに投獄されている。また、一六〇〇年にはジョルダーノ・ブルーノがそのコペルニクスの思想を信奉してゆずらなかつたために火刑に処せられた。

一六一〇年頃には、ガリレオはコペルニクス説を公然と支持しはじめていた。早速、ヴェネツィアの友人たちが心配していたとおり、教会との衝突が起こる。

『天球の回転について』は、当初カトリックの司祭としてのコペルニクスの地位を危うくするようなものではまかつたくなかつた。むしろその刊行前に内容を知った教皇クレメンス七世は、コペルニクスの説に強い興味を示し、早く出版するように激励の言葉さえ残したと伝えられている。またコペルニクスの上司に当たるシヨンベル

ク枢機卿は、出版にかかるさまざまな費用を分担してもよいと援助を申し出ている。コペルニクス説に対して、聖書の文章を引いて反論を加えたのは、歴史的に残るものとしては、プロテスタントのルターが最初である。ルターは、コペルニクスを馬鹿者と呼んで、激しく罵倒したという話も伝わっている。

しかし、一七世紀初めのコペルニクス説を巡る状況は、上述のとおり、それが発表された頃とはかなり変化していた。プロテスタントのなかにも、ヨハネス・ケプラーのように、熱烈な支持を与える人物も現れた。もつともそのために、ケプラーはルター派の聖職者になる途を断られたともいわれている。逆にルドヴィコ・テッレ・コロンベのようなカトリックのなかにも公然とこれに敵意を示す人物も生まれていた。コロンベの属するドミニコ会は、古く一三世紀に結成されたものだが、もともと南フランスのアルビジョア派の異端を糺すために誕生したといいききさつから、異端の摘発にはことのほか熱心だったのである。

実際、コロンベは「反地動説論」を書き、コペルニクス説攻撃とガリレオ攻撃に立った。また、チェザーレ・ラガツラはガリレオの言説を聖書の句と比較対照することを通してガリレオを非難した。ガリレオは友人のコンティ枢機卿に質問状を送り、自分の書いていることが異端的であるかどうか神学上の見解を求めた。その結果、地球が運動するという考え方がとくに聖書に抵触することはないというコンティ枢機卿の穏やかな回答に安心して、ガリレオは、一六一一年にローマ教皇庁を訪問する。

ガリレオのローマ訪問に先立ち、イエズス会士のベラルミーノ枢機卿はイエズス会の最高教育機関であるローマ学院の四名の数学者に次のような諮問をしていた。

ある高名な数学者が筒眼鏡と呼ばれる器具を使って行った新しい天文観測のことを、尊師たちは聞かれてい

ると存じます。私も同じ器具によって、月と金星に関するいくつかの極めて驚くべき事柄を見ております。したがって、以下の事柄について尊師たちの誠実な御意見をお聞かせ願いたいのです。

諮問内容はガリレオの発見のすべてを問題としていた。宗教的権威者にとつてガリレオの発見の真偽は無視できないものになっていたのである。四人全員によって署名されていた答申は、ガリレオの発見のすべてを承認していた。クリストファ・クラヴィウスだけが月の表面は滑らかであるという見解に固執していたが、ガリレオの発見そのものについて否定したものはいなかった。

ローマに到着したガリレオは、まささまにローマ学院の数学者クラヴィウスを訪問した。月の観測結果について解釈は異なっているけれども、このイエズス会士が自分の発見を認めてくれたことに、ガリレオにとって重要な意味があったのである。彼は当代随一の碩学として大いに歓迎され、持参した望遠鏡で教皇庁の人々に誇らしげに天体を見せるなどした。

このローマ訪問の結果、望遠鏡は天文観測器具として認知され、ガリレオはアカデミア・デイ・リンチェイ（山猫学会）の会員に選ばれた。こうしてこの時には、ガリレオ批判勢力も沈黙せざるを得なかった。だがガリレオの名声が高まるとともに、教会組織のまさに「増長したガリレオ」批判の勢力はしだいに増大してゆき、再び反撃の機会をうかがっていたのである。

◆第一次裁判

一六一三年一月二三日のトスカーナ大公邸での出来事が論争の新たな火種となる。朝食会で、高官たちも居

合わせたときに、「メデイチの星（木星の衛星）」が本当に実在するのかといったことが話題になった。たまたま同席していたピサ大学のアリストテレス学者コジモ・ボスカリアが意見を求められた。彼はガリレオの発見はすべて真実であると述べたが、その後、地球の運動だけは「聖書」に反する見解だと隣の大公妃に伝えたのである。そこで大公妃は、やはりそこに招かれていたガリレオの愛弟子カステッリに地球の運動と聖書の関係について質問した。その場では、カステッリはその関係に矛盾のないことを強調して、ガリレオの立場を弁護したが、彼も自信がなかったのか、翌日ガリレオにこの日の様子を報告し、ガリレオ自身の見解を求めたのであった。

一週間後、二一日、ガリレオはカステッリに丁寧に自分の意見を書いた長文の書簡を送った。少し長いが一六一年の第一次裁判に直接結びつく問題の書簡でもあるので、引用しよう。

聖書は裏切ったり誤りを犯したりすることはあり得ず、その命ずるところは絶対で、侵す可からざる真理であると考えます。ただ付け加えておかねばならないのは、聖書は誤り得ないのですが、その注釈や解釈をする者のなかには時としていろいろと誤りを犯すものがあるかもしれない、ということです。とくに、聖書の言葉に字義通りにこだわってしまったときに、最も重大な間違いがしばしば起こります。このようなことをすると「聖書のなかに」さまざまな矛盾だけでなく、ゆゆしい異端や冒瀆さえあるように思われかねません。たとえば神が足や手や眼を持っていることになったり、怒りや悲しみ、憎悪などの人間的で生理的な感情、過去の忘却や未来への無知などで、神が持つことになってしまいかねないからです。（中略）自然科学の問題が論争になっている場合には、問題が、聖書の語ったものとしての聖書の言葉と、神の命令の忠実な執行者としての自然の双方に、依存しているわけですから、最後まで考えていかなければならないものと

なります。(中略) 自然は、神から科せられた掟の則を越えることはありません。(中略) その一方聖書に語られていることのすべてがこの自然のような冷徹な義務と結びついてはいないので。(中略) 二つの真理がたがいに矛盾し合うことはあり得ないのです。(後略)

要するに、ガリレオは宗教と科学を混同するのは不適切だという自分の見解を知らせたのである。書簡の後半の内容から、宮廷での朝食の際に、『ヨシユア記』第一〇章一二、一三節、とくに「ヨシユアはイスラエルの人びとの前で主に向かって言った。陽よ、ギベオンの上にとどまれ、月よ、アヤロンの谷にやすらえ……陽空の中にやすらいで急ぎ没らざりしことおよそ一日なり」という件が問題になったことがわかる。ヨシユアの祈りに応えて、神は太陽と月の動きを止め、日没を遅らせたのである。

ガリレオは、ルター以来何かと問題にされてきた『ヨシユア記』を主題的に取りあげている。彼はいくつかの理由をあげて、『ヨシユア記』の例の件を額面通りに受け取るとすると、逆に、プトレマイオスやアリストテレス的な天文モデルの方が危機に瀕するということを、巧みなレトリックで主張するのである。しかし、かなり「スコラ的」なこじつけの論理が専行するような趣があり、反対派につけ込まれる余地を残すことになった。

実際、カステッリが不用意にも(当然善意から)ガリレオの書簡の写しを周囲の人たちに送ったために、その一部が反対派の手にも渡り、ドミニコ会のトマソー・カッチーニやニッコロ・ロリーニはそれを異端審問所に送り、ガリレオの勝手な聖書解釈を告発したのである。ガリレオ自身も一六一五年六月になって、カステッリ宛て書簡の内容をさらに詳しく書き直し、「クリステイーナ大公妃宛ての書簡」を送っているから、ガリレオの「聖書」についての見解がいつまでも敵対者に知られないということはなかった。

異端審問所は、はじめは取り合わなかったものの、あまりに激越な批判が繰り返されたため、慎重に審議をはじめた。提出されたガリレオの書簡が改竄されている疑いもあつたからである。その後、どのような事態が進行していたかは明らかではないが、教皇パウルスⅤ世がガリレオの一連の行動を不愉快に感じていたことは確かである。教皇は検邪聖省に訴訟手続きを進めるように求めていたらしい。

一六一六年二月二十四日、聖省の枢機卿たちは諮問を受けていた神学者の臨席のもとで、「譴責されるべき命題」を次のように正式決定した。

(一) 太陽は世界の中心であり、場所についてまったく不動である。

(二) 地球は世界の中心ではなく、不動でもなく、日周運動しながら全体的に運動している。

いずれの命題も哲学的にはばかけており、不合理であり、聖書の記述と矛盾しているがゆえに、形式的に異端であるというわけである。ここには、まだガリレオの名前は出てこないが、翌日の二月二十五日、教皇はベラルミーノ枢機卿に、ガリレオに対しここで問題になっている命題を今後絶対に弁護することのないように訓告するよう命じた。事実、その翌日二月二十六日にガリレオはベラルミーノの自宅によばれ、異端とされた二つの命題を放棄するよう申し渡された。しかし、実際の内容がどのようなものであつたかはわからない。

ガリレオは一六一六年五月二十六日に改めてベラルミーノを訪問し、次のような証明書を書いてもらっている。これを見ると、二月二十六日の訓告がかなり好意的なものであつたことが推測できる。後の第二次裁判の問題と重要な関連をもつので、以下、全文を引用する。

余、ロベルト・ベラルミーノ枢機卿は、ガリレオ・ガリレイ氏が余のもとで異端誓絶し、敬虔な悔悛を求められたと中傷されている、あるいはそうした罪を負わされていると聞き、ことの真相を述べるように要請されたので、ここに宣言するものである。前記ガリレオ氏はここローマにおいても、余の知るかぎり他のいずこにおいても、余のもとでも、他の誰のもとでも、彼のいかなる意見あるいは学説に関しても異端誓絶したことはない。ましてや敬虔な悔悛も、この種のいかなるものも課せられたことはない。教皇陛下によって起草され、図書検閲聖省によって公布された布告、つまり地球が太陽のまわりを動き、太陽は宇宙の中心に静止しており、東から西へ動くことはないというコペルニクスに帰せられている学説は聖書に反しており、それゆえ擁護したり抱いてはならないことを知らされただけである。これが真実であることを保証するため、余はこのことを自書し、署名するものである。一六一六年五月二六日

この一六一六年の出来事は、一般に「第一次裁判」と呼ばれているが、告発されたのはガリレオであったのに、判決という形をとらず、ガリレオ個人に対しては別の穏便な処置がとられたのである。

したがって、この裁判は、一般に誤解されているような、「宗教と科学の対立」、すなわち教会側がコペルニクス説という「科学的真理」を、宗教の立場から否定弾劾する、という性格のものではなかった。一七世紀初頭という時代状況と歴史的文脈のなかで、これを宗教と科学の対立と捉えるのは、時代錯誤というほかはない。ここでガリレオと彼の対立者との間で問題になり得るのは、明らかにキリスト教神学の内部における「解釈問題」であったといった方が正確であろう。問題を数学と自然学の狭い範囲に限定しておけば、何も批判や攻撃は起こら

ないのだ、とガリレオは警告を受けたのであって、これに対し、彼は問題を神学上のものとして取りあげようとしていたことが、この裁判の事情からうかがい知れるのである。

◆第二次裁判

一六二三年、ガリレオに好意的であったバルベリーニ枢機卿が、予想外に教皇に選ばれウルバヌス八世となった。ガリレオは大いに喜び、早速にローマを訪問し、新教皇に謁見した。そのときには、教皇はガリレオに対して以前と変わらず非常に好意的であったが、コペルニクス説に話がおよぶと、教皇の話は要領を得ず、ガリレオは微妙な雰囲気を感じ取っていた。しかし、ガリレオはその性格からして、楽観的に考え、長年にわたって計画していた地動説に関する体系的著作を書きはじめ、天文学分野での彼の研究の総決算として『天文対話』（正確なタイトルは、『プトレマイオスとコペルニクスの二大世界体系について』）を完成した。すぐに出版許可を教皇に願ったが、決して順調に事ははこばなかった。その書物はようやく一六三二年に出版されたが、それには予想以上に多くの時間と原稿訂正のための労力がかかったのである。

この書物が異端審問所の告発によって、ガリレオの第二次裁判へと発展する材料とされるのである。実際、『天文対話』は刊行後六ヶ月にして発売禁止となった。もちろん、ガリレオは驚いて、トスカーナ大公や知己の高官などを介して教皇にも訴えたが、かつて枢機卿時代にガリレオ賛歌まで書いたことのある知友であった教皇ウルバヌス八世の反応は意外にも冷淡であることが知らされた。さらに、異端審査の委員会が招集され、ガリレオはローマの異端審問所に召喚されるという事態に発展してしまったのである。

ここで疑問が生じる。教皇が一度『天文対話』の出版許可を出しているのに、どうして異端審問所の喚問が可

能となったのであろうか。これには教皇自身の心理的なことなどがその理由としてしばしば指摘されてきたが、根本的理由は、「地動説を擁護したり抱いてはならない」のみならず、「これを〔地動説〕をいかなる形においても論じてはならない」ということに対するガリレオの「誓約書」が裁判の途中で持ち出されたことである。すなわち、すでに一六一六年にガリレオは上のことを誓約しているにもかかわらず、『天文対話』で論じたことは明らかに違反であり、教皇庁の命令が無視されたことになる、というわけである。

しかし、第二次裁判の根拠となったこの誓約書なるものの信憑性には問題があった。この文書には、一六一六年の出来事が次のように述べられていた。

ガリレオはベラルミーノ枢機卿在住の邸宅に呼ばれ、枢機卿および検邪聖省の代表役員、ローデイのミケラ
ンジェロ・セジツイ神父殿下の面前で、枢機卿から上記意見の誤りを訓告され、それを棄てるように警告さ
れた。引き続き、上記枢機卿はまだおられたが、上記委員はガリレオに、教皇殿下と全検邪聖省の名
において、太陽が宇宙の中心にあり、地球が動くという上記意見を全面的に放棄し、これ以後、それを話し
ても書いてでも、いかなる仕方においても抱かず、教えず、擁護しないよう命じられた。さもなければ、
検邪聖省は彼を裁判にかけるであろうと。これは、上記枢機卿の家の一員であるバデイノ・ノレス殿下およ
びアウグスティノ・モンガルドを証人として立ち会わせ、ローマで執行された。

確かに一七年前の出来事であるから、ガリレオの記憶はあやふやであったと思われるが、第二次裁判にとって極めて重要なこの文書には、ベラルミーノの署名も立会人の署名もなく、肝心のガリレオの署名が欠けているの

である。おそらく、これはガリレオ批判勢力の人たちがガリレオをおとしめるために作らせた偽造文書であることは想像に難くない。もちろん、ガリレオは一六一六年五月にベラルミーノ枢機卿から与えられた証明書を審問所に提出している。

二つの文書の違いは微妙であるが、重大である。ベラルミーノ枢機卿の「証明書」には、明らかに「いかなる仕方においても」と「教えず」という部分がなく、コペルニクス説を擁護したり抱いてはならないことだけを禁じているのであり、真実としてではなく、仮説ということであれば教えることも問題にはならなかったであろう。したがって、地動説を学問的に論じた書物を発表することがこの警告に違反するとは、ガリレオも思ってもみなかったわけである。しかし、偽造の疑いのある「誓約書」では、地動説を紹介するだけでも罪に問われかねないということになる。「天文対話」がこの「誓約書」に抵触することは明らかである。

このように、ガリレオの宗教裁判は、教皇庁内の陰謀による「デッチあげ」の可能性が濃厚であるが、そうであればなおさら、教皇庁としてはガリレオを無罪放免とするわけにはゆかなかった。

一六三三年六月二二日、最終的にガリレオは次の三点について判決を言い渡された。

- (一) 『天文対話』を禁書とすること
- (二) 検邪聖省が望むだけの期間、聖省内の牢獄に入れること
- (三) 贖罪のために、三年間にわたって毎週一回、七つの悔罪詩篇を唱えること

この判決には七名の署名しかなく、他の三名の委員は署名を拒否したが、判決そのものは有効であった。この

ことから、ガリレオを擁護する者がまだ聖省内に存在していたということがわかる。極めて変則的な裁判であったが、判決が下されると、ガリレオは跪いて異端誓絶を行った。「わたくし、故ヴィンチェンツイオ・ガリレイの子、ガリレオ・ガリレイ、七〇歳は、個人的に審問を受け、……異端誓絶し、誓い、約束し、責を負う。そして、その真なることの証しに、自分の手で自分の異端誓絶のこの書類に署名し、ローマ、ミネルヴァ修道院で一語一語朗読した。一六三三年六月二二日」。文章は、もちろん聖省があらかじめ用意していたものだった。

一六一六年の第一次裁判では判決もなく、穏便な訓告で済まされたのに対し、第二次裁判でははっきりと有罪を宣告された。老いとともにかなり衰弱していたガリレオは、拷問の脅迫前に屈服し、起訴事項を受け入れ自分の罪状を告白したのである。彼の身柄は、実際には投獄されることなく、知己の貴族に任された。五ヶ月後には自宅に戻ることを許され、フィレンツェ郊外のアルチエトリの別荘に幽閉されることとなる。

すでにそのときガリレオは偉大な著作『新科学論議』（一六三八年）の出版を計画していた。さすがに我が身の立場を考え、イタリア国内は避けてオランダで刊行されたが、やはり幽閉の身のガリレオが教皇庁の許可なく、しかも新教国のオランダから刊行すれば、無事にすむはずはなかった。しかし結果的に、教会はこれを黙認したのである。このときガリレオは両眼を失明し、自己の新著を読むことはできなかったが、それでも口述筆記で彼は最後まで増補の努力を続けた。しかし、ついに一六四二年一月八日、ガリレオは寂しくこの世を去った。

こうしてガリレオの冒険は、悲しむべき一つの結論に達した。彼は地球が運動するとの信念を異端誓絶し、残りの人生を自宅幽閉状態で過ごすよう強いられた。元々のパトロンであるコジモは亡くなり、その後継者はガリレオの経歴にそれほど投資はしなかった。教皇ウルバヌス八世になったガリレオのかつての友人バルベリーニさえも、保守的な僧侶層の対立によって引き起こされたより深刻な政治的諸問題を前にしてガリレオを見捨てたの

である。その一つに、教皇庁がイタリアの内部にあるハプスブルク家の出先トスカーナ大公国の隆昌に危惧の念を抱いており、その象徴であるガリレオをたたいておくことによって、トスカーナ大公国にも間接的に打撃を与える目的があったという指摘もある。

三、おわりに

改めて「ガリレオの宗教裁判」を概観してみると、科学と宗教の関係は、この事件における重要な争点となっていたことがわかる。しかし、ガリレオ裁判は仕組みられた裁判であり、これを直ちに科学と宗教の対立関係の結果とみなすことはできないであろう。

科学と宗教の関係についてのガリレオの考えは、『クリスティーナ大公妃宛ての書簡』に明らかである。聖書も自然も、ともに神の御手に由来する。啓示は聖なる書物と自然という書物で等しくなされており、両者が本来的に矛盾することはあり得ない。これがガリレオの根本的信念であった。しかし同時に、彼は聖書の自然記述に關しては、その解释权を神学者から自然科学者へと移譲させ、神学を頂点とする中世以来の学問構造を崩す方向を示した。科学の自律性を主張するためのガリレオの提案は、神学の領域に自然学が介入することを、その一部であるにしても、認めるものであり、当然、それは科学を越えた諸領域（宗教、社会や生活の規範など）にまで及ぶことになり、それらの諸領域を統括する権力側にとつては無視し得ない問題となったのである。いずれにせよ、ガリレオはその時代の宗教裁判に敗れ去った。ガリレオ裁判は、きわめて「政治的」なものだったのである。

二〇世紀後半にはいり、明らかに教会はガリレオ裁判の批判をみずからに向けている。教皇によるいくつかの表明を経て、ガリレオが有罪判決を受けた一六三三年からちょうど三五〇年目の一九八三年、文字通り『ガリレ

オ・ガリレイ三百五十年の歴史』として調査・研究の成果が出版された。そして、一九九二年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が、ガリレイ裁判は誤りであったことを認め、ガリレイに謝罪した。ガリレイの死去から実に三五〇年後のことである。

参考文献

- (1) 青木靖夫『ガリレイ・ガリレイ』(岩波新書、一九六五年)。
 (2) ジョルダノ・ブルーノ『無限、宇宙と諸世界』清水純一訳(現代思想社、一九六九年)。
 (3) 『三五〇年後のガリレイ再審』(誌壳新聞、一九八〇年二月八日朝刊)。
 (4) スティルマン・ドレイク『ガリレイの生涯』(全三巻) 田中一郎訳(共立出版、一九八四―八五年)。
 (5) 佐々木力『科学革命の歴史構造』上(岩波書店、一九八五年)。
 (6) 渡辺正雄編『ガリレイの斜塔』(共立出版、一九八七年)。
 (7) 古川安『科学の社会史・ルネサンスから二〇世紀まで』(南窓社、一九八九)。
 (8) 村上陽一郎『科学の言葉・宗教の言葉』、『宗教と科学の対話』(岩波講座「宗教と科学」第一巻)(岩波書店、一九九二年) 所収、九三―一七頁。
 (9) 田中一郎『ガリレイ―庇護者たちの網のなかで―』(中公新書、一九九五年)。
 (10) 佐々木力『科学論入門』(岩波新書、一九九六)。
 (11) 高橋憲一『近代自然科学の成立』、『人間と文化』根井豊・新島龍美編(九州大学出版会、一九九八) 所収、四一―七五頁。
 (12) 伊東俊太郎『ガリレイ宗教裁判の真相―それは誤審であった』、『伊東俊太郎著作集』第六巻(麗澤大学出版会、二〇一〇年) 所収、二四五―二五四頁。
 (13) ピーター・ディア『知識と経験の革命―科学革命の現場で何が起こったか』高橋憲一訳(みすず書房、二〇一二年)。
 (キーワード) 科学と宗教 ガリレイ 宗教裁判